
我が親愛なる魑魅魍魎

饅鳩

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

我が親愛なる魑魅魍魎

【NZコード】

N8745V

【作者名】

鏗鴉

【あらすじ】

魑魅魍魎。それはおおよそ科学では説明できない存在たちの総称。

これはそんな魑魅魍魎と人間たちのバトルファンタジーである。一応。多分。そのはず。ちょっと自信なくなってきた。だって、みんな遊ぶの大好きなんだもん。

ホワイト・クリスマス（前書き）

ちゅうとした、前口譲。

ホワイト・クリスマス

この世界には、多くの“魑魅魍魎”がいる。靈、妖怪、怪獸、天使や惡魔……（これらを魑魅魍魎として良いか悪いか、というのは別問題だ）、これは代表例だが、とにかく沢山いるのである。

何故そんなことが言えるのか？

そりやあその魑魅魍魎が、知り合い、知り合いの知り合い、知り合いの知り合いの知り合い、知り合い + の知り合い () × n …… そういう具合に、数えきれないほど身近にいるからだ。

先に言つておこう。

俺は凡庸な普通の青少年である。一般大衆の内の一人であり、60億の内の一人に過ぎない。想い出深い出来事、と言えば、運動会や音楽会、入学式や卒業式、友達が出来ただ、その友達と喧嘩しただの、そんなような事しか思い浮かばない、世間一般的、“何処にでもいるような”高校一年生15歳である。

そんな俺が何故魑魅魍魎共と知り合つたか、そこには、世間一般的とは掛け離れた理由が勿論ある。

これは中学三年生の、最後の冬休み。その時に執り行われた、『季節外れの胆試し』の出来事である。

「ふううう……」

机に突つ伏し、長々と息を吐く。

本日12月22日10時34分、我が母校『臥中学校』の一学期終業式が終了した。あの無駄に長く、無駄に陰鬱な校長先生の“有難い”お話が終わった時は、まさに天に飛び立つよくな心地であった。

「何を一人でぶつぶつと言つとるんだ？ キモいから止めとけ。」

と、唐突に話しかけてきたのは自称「我が親友」である。

「独り言言つて皆にキモいと言われるのとお前と会話するの、どちらが良いかなど、考察するまでもないな」と、毎度毎度変哲のない憎まれ口を叩く俺。

「…………『言葉の暴力』といつ言葉を知つているか？」

無駄に爽やかな笑顔。

「『心の傷は体の傷より苦しい』といつ言葉なら知つてている

言つと更に爽やかさを増し、「フツ……確信犯か……。流石は我が生涯の伴侶」なんて聞き捨てならんことを口走りやがった。

「貴様……その言葉の意味、知らぬ訳ではあるまい……。氣色が悪い！」

俺は即刻立ち上がり、仰々しく腰に手を当て刀の柄を握る真似をする。

「我が友にして最高の好敵手、高原梧よ。知つていてその言葉を使つたに決まつているだろ？」「たかはるむおかよ」

自称『親友』、上島祭も、同様に腰に手を持つてゆく。

「フン……相も変わらず鬱陶しい奴だ……上島祭。我への侮蔑がどれ程に重い罪か……、今日こそ貴様の体に刻み込んでやろう……！」と、言つか言わないかのタイミング。俺は祭に手刀を繰り出そうとして、「がふあ！？」と絶叫。俺の額に何者かと言つても犯人は一人だが、の裏拳がジャストミートしたのだ。

「きささげ梓え！！」

俺はのけ反つたまま、その犯人あずまきささげ我妻梓の名を叫んだ。

「つむつさい！ 大声出すなあ！…」

俺のすぐ右にいた梓は、俺以上の大声を張り上げて、俺の脇腹にボディーブローを叩き込んだ。

「つたく……あおくんもまつちゃんも、一学期最終日くらい静かに出来ないの？」

腹立たしげな梓の問いと言つか決まり文句を、

『出来ん！ それが俺たちだ！』

俺と祭は見事なハモリで答えた。

『フッ……！』

俺たちはグツと手を握り合つ。親友のつもりはないが、仲が悪いつもりもない。てか寧ろ仲は良いのだ。

「ハア……。」

梓は呆れが溢れ出でている溜め息を吐いた。

因みに、俺の家の左隣は梓の家。そのまた左隣が祭の家。つまりはお隣さんの幼馴染みなのである。実に不本意ながら……。家が遠くて、学校でしか会えないような奴であつたなら、祭も梓も、無二の親友になっていたであろうに。なまじ近すぎるのも問題である。

「ま、おふざけは終いにして、梓は何でここにいるんだ？ わざわざソシックリミィに来てくれたわけじゃないだろ？」

祭の言葉によつて茶番劇は終幕である。そのまま続けて面白かつたかもしれないが。

「そりや当然でしょうが。ちょっとね、明明後日^{ヒタヒタ}に『胆試し』しようと誘われてるの。で、一人も誘おうかと思つて

『『胆試し』い？』

再びハモつた俺たち2人の声。

「何だよ、その季節感つて言葉を踏みにじるようなイベントは。てか、明明後日^{ヒタヒタ}つてクリスマスじゃねえか」

俺はそうソシックリミィをいた時には、梓はもうドアの所だった。

「その話は放課後にね～～！ しつかり考へとけよ～～！！！」

なんて満面の笑みで叫び、梓は教室を出ていった（梓は隣のクラス

スだ）。

「みんな、座れー！」

それと入れ違いに担任の先生が入ってくる。

「ビーする？」

皆が席に着く中で、祭に話し掛ける（祭は俺の前の席だ）。

「ビーするもーーするも、梓の性格からして、俺らに拒否権は無さ
そうだ。でもも、楽しそうだからいいじゃないか」

祭は比較的（比較対象は俺だ）軽いノリだった。

放課後。

「で、ビーする？まあ、来ないって言つても引っ張つてくべ

帰りの通学路で、梓は予想通りのこと言つた。

「ま、行くことに異存は無いが……、梓、お前怖い系苦手だろ？」

祭がそう言つと、梓の体がビクンと震える。

「だ…大丈夫！　どうせ臘中の旧校舎だし、出ないよ、幽霊なんて！」

それはつまり“出れば怖い”ということなのだが、梓的には“怖くない”といつてコアンスであろうから、ツッコまないでおく（ツッコんたら何されるか、知ったもんじゃない）。

「ともかく！　これで決まり！　クリスマスの夜11時に臘の旧校舎だからね。それと、ちゃんと先生に許可もらってるイベントだから、心配は無用よ」

企画、準備に関わってないであろう梓は胸を張った。

てか、クリスマスにわざわざ学校側に申請してまでこんな事をしようなど、寂しい奴らである（俺もその一人なのが）。

「ま、これには恋人作りとしての側面が、少なからずあるんだろうけどな」

祭が再び無駄に爽やかな笑顔で、『それを言つたらお仕舞いよ』なことを言つた。

小さな男の子がいた。近所の公園の砂場で、ただ一人で。楽しそうでも、つまらなそうでもなく、全くの無表情で砂山を作っていた。

『何してるの？』

一人の女の子が、その子に話しかけた。

『…………』

男の子は返事をしたが、身動き一つしなかった。

『…………』

女の子はその子に向かって二つのココと笑うと、その子の向かいに座つて、砂山作りを手伝い始めた。

『…………』

それから二人は、会話を一つ交わすことなく、砂を積み続けた。一方は無表情に、もう一方は本当に楽しそうに。

「起きろオオー！」

突如、鳩尾に凄まじい衝撃が走った。

「あつ……がつ……つ……！？」

呼吸も儘ならないままに周りを見ると、犯人（確定的）我妻梓と、呆れ顔の上島祭が俺の寝ているベッドの脇に立っていた。

「何であおへんはこんな時間に寝てんのよおーー。」

訳の解らないまま突き出されたケータイの待ち受けを見る。この畢ではかなり希少なケータイである。

「12月25日10時36分……」

そう言えば晩飯終わってけょっと仮眠揺らうといふと…………今日何かあつたつけ？

「きこもおだあめえしい～～！～！」

梓が俺の両頬を思い切りつねった。俺の叫びはきっと天を衝くほどものであつただろう。

「文句は後でもいいだろ。遅刻するぞ？」

祭がさつきより呆れの色を強めて言ひ、ちなみに、学校までは20分掛かる。

「ほーら、急いで立つてーー。」

梓が無理矢理に俺を引っ張つていぐ。俺はされるがままに（その方が楽だ）、学校に向かった。

で、皋中旧校舎。

「お、ようやく来たな！」

梓の友人（名前は知らない）が、待ちかねたように（実際待ちかねたんだろうが）駆け寄ってきた。

「結構……いや、かなりいるな……」

祭が戸惑つた風に言った。

いたのは30人ほど、男女比は半々くらいか。確かに驚愕の人数だ。

「寂しいなあ……」

俺が率直に述べると、何人が身動きだ。やはり彼氏彼女と過ごしたかったんだろうな。ま、そんなのいればここにいないだろうが。

「よし、全員来たな？」「ここ元ぐじがあるから引きに来てくれ〜〜！ペア作るぞ〜〜！」

旧校舎玄関前に何人かが立ち、集まった奴らに指示を出す。アイツらがこの聖なる夜に独り身の虚しさを紛らわせるためのイベントを企画したのか。よくやったと言つべきなのだろうが、それは称賛なのか皮肉なのか……。

「おい、これはどういう意味だ？」

俺の引いた紙には《一人》と書いてあった。

「それはまんまと。今回33人集まつたから、一人余るの」

箱を持っていた娘が説明してくれた。

「33人集まることが分かつてたら、三人一組にすれば良かったんじゃなかつたのか？」

そうすれば11組で丁度割り切れたのに。

「…………」

その娘はたちまち困ったような顔になり、

「や…やつぱい」のうのうて、ペ、ペアが基本だし！」

たゞたゞしくやう答えた。

OK、成る程。気が付かなかつたのね。

「いいよ、別に。一番最後じゃなければ」

皆の待つ中一人で胆試しに興じるなど、笑い話にはなうが、あまりにも恥ずかし過ぎる。俺はそこまで勇者じやない。

「あ、そこは大丈夫。心境を考えて、一番先に終わつてもらうから。つまり一番最初」

「はいはい。アリガトさん」

そこを考慮する暇があるのなら、三人一組でピッタリだと早く気付いてもらいたかったものだ。

「何だよ、つまらん奴だなー」

そんな俺を祭はす「じぶる楽しもひに迎えた。相も変わらぬ一さわやかな顔をしゃがつて。

「何なら変わつてやうつか? 思いつ切り笑つてやるよ

是非とも無償で譲渡する所存である。

「馬鹿言つな。俺はそこまで勇者じやねえよ」

じつやう俺たちの思考パターンは似通つてゐるやうだった。

「つまらん……」

「」の胆試しば、旧校舎の理科室、音楽室、図書室、用具室の四ヶ所を回る、といつもので、現在は最上階、四階の理科室を残すのみだ。

にしても、

「つまんねえ」

隣に話し相手はいないし、幽霊、妖怪、その他の類いも勿論ないな。何が面白いと言うか。

「これなら、来なくても良かつたんじゃないかな？」

俺が来なければ32人で丁度だったのだ。もしされでなくとも、俺が梓以外の女子と楽しく会話出来るのは思えない（この胆試しに集まつたのは、男子17人女子16人だ。それが偶然か図られたことかは分からんが）。

「そーだよな、俺が行かなきゃ誰かが一人で、なんて状況にもならず、あの夢の続きも……」

そこまで言つたところで言葉が消えた。

そうだ、あの夢……。一体何だつたんだろう。

あの男の子は俺なんだろうが、女の子の方に見覚えが無い。それに、確かにあの頃の俺は無口で無愛想で、誰とも　梓や祭とともに良くしない生意気なガキだったけど、全くのノーリアクションなんてことはしなかつた、てかそれ以前に、そこまで徹底した人嫌いじゃなかつた。

「コトン

四階まで上がつた時、その思考を遮るように、 “ 理科室の方向か

ら”物音が聞こえた。

「まさか……な……」

そうだよな、幽霊、妖怪、その他の類いなんて、まさかいる筈がない。

先に言つておこう。梓にああ言つたが、別に俺は幽霊、妖怪、その他の類いが“怖くない”わけじゃない。テレビの心霊特集なんかを見た後、つい後ろを振り返つてしまうようなchickenだよ。いや、俺がchickenだとかkitchenとか以前に、この状況下で“恐怖”という感情を抱かない人間がいようか、いやいまい。いやいまい！

大事な部分だから二度言つた。え？ 心理描写が長過ぎる？ 嘘やかま！ 何かしてないと不安なんだよ！

ガタガタガタッ！！

再び俺の思考は遮られる。

「…………行くか」

それによつて踏ん切りがついたようだ。

確かに怖い。だが！ 逃げたとなれば少なくとも卒業するまでの三ヶ月はネタにされる。それだけは避けねばならない！！え？ さつさと行け？ 喧しい！ 決心した後が一番躊躇つもんなんだよ！

「で、理科室前」

取り敢えずナレイション。

ちなみに、理科室からはガタガタツッつ音と話し声みたいなのが聞こえてる。

- 1 -

ドアに掛けた手が動かない。その時脳内では開けなくてよい理由を懸命に模索中である。まさか俺がここまでchickenだったとは、驚きだ。

ガラツ！

そんなchickenである俺が　え？“chicken”使い過ぎ？　一の足を踏んでいると、ドアが勢いよく開かれた。

〔 〕

かなり長めの沈黙。

俺の目の前にいたのは、つまり、このドアを開けたのは、
紛れもなく、人体模型であつた。

我がプライドの為に言つと、この叫びを上げたのは人体模型である。

するとその後ろにいた骨格標本、カブトガニの模型、地球儀何で？　……etc、が俺に気付きまた叫びを上げた。

「…………」

その時俺は声を上げるのも、腰を抜かすのも、そもそも驚くことすらも忘れ、ボーゼンとしていた。何故なら、その人体模型その他諸々が、不思議な踊り　　言葉での形容は不可能そうだが、敢えて言葉にするなら、“盆踊りと阿波踊りとドジョウ掬いをかけて（数学的な意味で）、13で割つたら8余つたような”……言ってて訳解らんな　　をしていたからだ。

「くくつ……」

その滑稽な舞いを見ているとつい笑つてしまつた。
でも、その笑顔も直ぐに搔き消される。

「…………つ！」

俺の懐中電灯の光が照らす先には“真つ白”な女の子がいた。白磁の肌、そして白髪のような、色の抜けた白とは違う、白“色”的長髪。漆黒のワンピースと、もたれ掛かっている教卓の濃い焦げ茶色と、懐中電灯の淡い橙の光が、それを更に際立たせていた。

だがそれよりも圧倒的に、絶対的に、心の奥に何かが引っ掛かる。いや、引っ掛かると言つより突き刺さる。チクリと、いや、グサリと。

「き、君つて、え、えつと、き、胆試しの子だよね？」

件の人体模型が明らかに焦つた表情　　は無いのだが、とにかく

焦つてはこる で話し掛けってきた。

「あ、ああ……つて、やっぱ何かしらのトコックなんだな？」

少し、いや、かなり安心する。

と、

「いや……や……」

「ゆ、言つわけにはいかないだろー。」

「でも後で詮索されても……」

「一体何が議題なのかは分からないが、とにかく俺は蚊帳の外のようだ。」

なので、取り敢えず机に寄り掛かっている女の子を見る。

「…………」

綺麗だった。でもそれは、例えば美術品なんかに抱くそれと同義なもので、欲情とか、そんなものとは無縁の、純粹な感想だった。

「んん……」

殆ど無意識的に、彼女の頬に触れた。するとすぐつたそつに身動きして、その顔に微笑みが浮かんだ。

「ああーっ！」

もう頭から半ば抜け落ちていた人体模型たちが突然大声を出す。

「な、何だよ！　いきなり！」

し、心臓がドキドキ言つてんじゃねえか……。

「「」、「ごめんね」。その子、いろいろと事情があるから……」

「事情？」

明らかにさつき以上に焦つている人体模型を睨む。

「女の子をこんな所に軟禁する事情って、一体何だよ

ん？　なんか俺、『オイツらと普通に話せてないか？　いや、色々と言わなきゃならんことがあるだろ』ってよ。

「そ…それはあ　　ドンッ！…！」

人体模型の言葉を遮るように、突如轟音が響いた。一体何が起きたのかなど分からぬ。取り敢えず今の状況を説明すると、『理科室の天井と壁が爆発によつて大破し、床も同じようになりつつある』ということだ。

「き、君！」

唚然としていると、人体模型に呼ばれた。

「彼女を連れて早く逃げて！お願い！」

「え……え！？」

意味が理解出来ないでいると、大破した壁の付近、もうもうと上がる煙の中から巨^ヒ大な“何か”が、のつそりと現れた。

「よもや」のよつな片田舎に囁^{ささ}つたとはの……」

くぐもつた、まさにファンタジー映画のモンスターのよう^な声の主、現れたそれは、まさにファンタジー映画のモンスターのよつな、巨^ヒ大な赤いトカゲだった。

「サ……サラマンダー……。まさかこんなのが来るなんて……！」

人体模型たちがざわざわと騒^{さわ}ぎ出す。

「ふふん……“白亜”の確保なのだ……。万全を期すのは当然だろうて」

“はぐあ”？　あの娘を見やる。この娘の名前なのか？“はぐあ”が“白亜”なら、なるほど分かりやすい名前だ。名は体を表すというか。つて、そんなこと言つてる場合じやなさそうだ。

「分かつた！　安心しとけ！」

白亜　もうこれが名前でいいや　　を、所謂“お姫様抱っこ”で持ち上げ、理科室を飛び出した。

ボウウウウッ！……

飛び出した刹那だつた。赤銅色の炎が、俺がさつきまでいた空間を飲み込んだ。

「人体模型えつ……！」

なんか緊張感が無いな、なんて場違いなことと、逃げ切れなければ死ぬかもしないという恐怖。この二つを抱きながら、全速力で階段を目指す。

「人間風情が愚かな真似を……！」

バキバキという木材の軋む音を響かせて、炎の中からトカゲが歩いて俺を、いや、白亜を追つてくる。

「これがどうこうとかはもうどうだつていい！　早く安全なトコまで！」

自分を勇気づける為にそんな独り言を叫びながら（独り言は癖である）、古びた廊下を疾走する。

扱いでいる女の子、白亜は随分と軽い。女の子ってこんなものなんだろうか。それに肌もなんかすべすべだし、今持つてる太ももは、なんか…こう…ふにふにと……。それに今の時期にはかなりおかしい薄手のワンピースの胸元は、前屈みの姿勢の為か、その…谷間が形成されてるわけ……。しかも結構大きいし……。

さつきは『欲情とか……』なんて言ったけど、今は欲情にまみれてるよ、俺！　しゃあねえじゃん！　今まで俺、梓以外の女の子と、まともに話したことないし！　それに素肌なんて、梓のだって触ることないし！　いやまあよく殴られてるけどさ、ミニスカートから覗く太ももとか見てるけどさ！

「あ……」

なんて考えていたら、なんと階段を通り過ぎてしまった。この旧校舎は、一直線の廊下の真ん中の位置に階段がある、という構造になっている。ちなみに理科室は廊下の端にあり、そこからあの化け物トカゲが追いかけてきている。階段を通りすぎた、ということは、俺、もとい俺たちは、袋小路に閉じ込められた、ということだ！

「つて、冷静に考察してる場合かぁーつ……」

半ば自暴自棄に、理科室とは真反対の位置にある教室のドアを蹴破つて、その中に駆けずりこんだ。見回してみると、エレベーターの教室は調理室らしい。

「愚かな……死ぬ命、足搔くだけ虚しいだけだらう……」

ドアを周りの柱ごと破壊しながら、トカゲが調理室に入つてくる。「アドバイスどもアリガトさん。でも、だからこそ足搔くんだだろ？ 若さつてのは後悔を恐れず突き進むことだつてじこちゃん言ってたからな！」

無論ただの強がりなわけだけど、でも、成り行きからでも『女の子を守る』という立場にいる自分が、その子の前で弱気になっちゃいけない、なんて思った。

長いため息を吐き出したトカゲ。

「それは“若さ”ではない……幼稚と言つのだ……」

そして、大きく息を吸う。

まさかさつきの理科室みたく炎を吐く気か！？
るんだろう？ この娘も一緒に死んでしまうぞ！？

「業火に焼かれる苦痛にまみれて、死ぬといい！」

息を吸つたままの状態で、どういう仕組みなのかそう言つた。俺は、逃げることも、叫ぶことも、呼吸することさえ忘れていた。眼前に迫り来る炎。最早絶対と言える“死”。怖いかと訊かれたら怖いんだろう。でも、今の俺にはそれは感覚出来なかつた。

ようやく絞り出した声。それは恐怖のためじやない。俺を鼓舞するためだ。

ドア、出口に向けて走り出す。だが炎の波は大きく、その出口ももう燃やされてしまうだろう。つまり間に合わない。ゲームオーバー。

「大丈夫だよ」

か細いけど、芯の通つた声だつた。

」
「...
？」

気が付くと、炎は搔き消えていた。

「ちい……田覚めたか……！」

トカゲが恥々しげに歯をしつする。声の主は白亜だった。「ちらりを見て二口りと微笑んでいる。そして、あのトカゲに向けて手のひらを差し出した。すると白亜の手が赤く光り、炎がそこから沸き上がる。それは床を焦がしながらトカゲを飲み込んだ。

「ふ……サラマンダーに炎が効くとも思ったか」

だが炎が霧散した跡に、トカゲは無傷で立っていた。そして、のっそりと歩み寄ってくる。

ベキベキッ！

「えつ！？」

その音が聞こえた時にはトカゲが見えなくなっていた。そしてまたもベキベキという音と、ズシンと地面にぶつかつた音。あのトカゲは床を突き破って、そのまま一階まで落ちていったのだ。

「そらそうだ……普通に歩くだけで床が悲鳴を上げるんだ。炎に焼かれて脆くなつてたことは耐えられないよな。しかも落下エネルギーも付随されて、か」

ならこの娘はそれを計算してさつきのあれをしたのか？　いや、それ以前にあれは何だつたんだ？

ピー ポー ピー ポー ……

消防か警察か、その両方が。けたたましいサイレンが次第に近付いてくる。

「ちつ……！」

するとここからでも悔しがってるのが分かる表情で、トカゲは森の方へと消えていった。

「終わった……のか……」

力無くへたり込む。頭が上手く回っていないが、つまりもつ安全つてわけだ。

「あおくん……」

ふと、白亜が呟いた。

「あお、あじくん……！」

どんどん表情が明るくなつていぐ。

「ああ……そだけど……「わつー!..?」

そう答えたのとほぼ同時に、白亜が俺に抱きついた。

「あおくんだあおくんだあおくんだあー

俺に頬擦りしてくる丘里。

「わ…ちよつ！ なんなんだよお前はー、つて首絞めてる首ー。」

わざまでの緊迫はござりやが、子犬がじゅれ合ひよつじたばた
とする俺たち。

とまあ、これが一番最初。俺と丘里との出会いだ。

そして、これから《魑魅魍魎》たりと出来ていくわけである。

ホワイト・クリスマス（後書き）

厳密には魑魅魍魎と知り合ってないのは内緒。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8745v/>

我が親愛なる魑魅魍魎

2011年10月9日18時29分発行